





内田



嚙鳴館遺草卷第三



大正九年九月廿日
内田宗子氏贈



山本六輔之内

○およそ糸本と極うたひるよ二葉三葉より版長
も用ひたつ木本ともぬまくすへ始中経の
三段ありぬまへ勁系ゆうあは堅木あすと然るも
さうくら苗系あ木のねり川きともみゑくよ
し直ともともち曲てもうたひへ一色も始也
既よ草とねり本ともまくい勁き笑ちくま木も
年月よほよもワリて刷本がたそ繩とゆくて



せうもんとすれどもあらうのまへます
是中を免るを莫うり枝葉繁茂すとぞれ
の用ふたりやくよめりやふせたうへ終るまづけ
始中絶の差ひよろとほくつきととある本ある
の時よりんがつけて育れど若方もとく良学
良本の用と必ずとあるとある本の自由よおれ
そとて參理が曲接りて心のゆゑよそとすれど
いわゆる勁草堅木も或は枯或はいそとてたゞ
季月が往てもいもあひねきて利用ふゆへぐ
草木れどもあらず禽獸も又あらず駒児犢牛犬子

獨りの育まで始中絶であるを承るよく獸が
勿よその始中終をひき理とぞとひくをそ
それの生が急一じへへ萬物の榮貴する
ものとソシモ始中絶のあるとくに脚もあれ
ともか一故よ古の聖人亥海の言ふ所をえて
人情と遂に一ちゆく尊卑貴賤品々と引き
教となり道伐すとく性命とたのくまきよ
さてモ義の法よ始中絶とつゆて天の性よ
運ひゆくぬやうよ定めおきゆくとも
○人の始中絶は初サが始と一強壯が中と

を裏に腰とすみて時よをひ安戒を施す法
一同がすとそと先あはうとゆる重人
の妻が乳がぬくとて舐め吸とくめられて娘を
娘見ゆる元彼をも下毛こねーたるをせり
がさすと下毛されて元彼をさればとも頬
もきずて額ゆもとのよりたるをのらあむかふと
さうすサ吐きの三の財をひてもうとさうす
つまごがねかへーしき毛うよあうとし但一
人の事物の柔らかくもぬく柔軟くやたまう
ぬきとあ木あ木の財よりも身を絶よはれて

善くもめよじふ毛うみと年をもあうとひま
大すのあせ年理よまけたとぞねとも自然と
成長ちりしてそれの徳と朱然ぞーむる
といふぬ所ももとへあくへのあくうすとよ
胎教とりひて妊娠のりやより徳をめが
げあややと生るゝみの吉祥とをじとねれり
海て生きたるうのくわやかも及ぶるも
あよめのうり先やつよあう人の善悪邪正
機かあきて幼弱単身の上がをもれせよ
あすする懷の自然のやーとれふを作成せ

人ものまことにすりぬる處の卑賤をよみゆく
まことにむる懷するもが惜じとへと教るの
極をうり

○三位をぶ術の入せより僅よ乳子と放きふう
よりくらむべ又母兄長の威と恐れかより他人
の戒と慄でていまゝ是非のそばに辯(き)る
とも何れもきゑん換投するものといふくわ哉
かく是素賤の人のと畏敬するよやくいはだる
ものとぞうよするものとせすへ胎内とりひく
うゑきまそれ出まへすへとあひてお見るま

なうけて僅よ人とぞあひゆより人く畏敬の
らとりてたかよ徇徳する往の者へ息ひひそち
容がぢりて先き産の様端(とき)もしくて身
反扱ひきよるとぞたゞひ又母兄長の戒を
うあすやくふとありとりとも稀たまほう
おうとくとぞ牢へたよきのを抱せまよ
そたちよとぞおきの幸よ善良の質とまよ
もそれうちよとぞ賢能のすくへりたまよも
あきよとぞ一不幸つゝて驕傲のまよがま
きくも遂すく時も巣居のまよがまく古今

まれううう見ひてすくへよ畏敬を蒙せらううみ
やもゆる懷をそぐと畏敬を蒙するよお懷をもむ
されあこあよいづへどり師傳のれとくもくも
き威と嚴す一日夜よその戒戒が披まつて
畏敬をもするをだびぞる懷をじろとくすの
三公三孤のまうあいきうちもれ紀すへ天子も
太ふとくへとまよあよみうすく年子の下す
座へすとがちうすとすよきのなす
ア村へ下とソノモシ翁ちぬとくとく
きり毛と古の姿とがくくもつへ幼よく

お煙すらおび持ゆ一やそりの私うう喫めの
徳が成就することあ本あまの財とりよ本とく
力縛をくちて萬能とくも良草良木を用と
集めすと美うるゝとお

○教あり類すとれふ毛竹とまひつまくへ
たゞ一へ次もももかよめう人と撫じと
立みかきの要れつ曲きう本びたて立も
新がねつすよしめ戒の下」よむ人の
生うきを理す「坐」立もあびたて立
一丸新がねうとすれと日月のえき

てへまやうりぬとおねう師傳の礼がるや
ヤマトの威と歴史あじしゃかとく先え
の帝君とまよし夏敷があはへたまよす
始るてわうつうり忠臣の士とりともえ
所の命と御く遇きあ行の愚濶され
せよの畏敬がねとすへきひを

○師傳へ忠良がねとんとをもとめの后和ま
ねされし害長のをますとと一初き侍る
毛利雅徳うつるふくづくまきうやー行
よやうされ毎別もよよぎむばす一

よく宜一とや一とくよくへよ一とくへ
とゆるまくと又アヘカキモとをきるときり
うかくすらましひゆてももとへ自己からん
うらひゆふくよめまきもよよりがほ
えれ翁の敗きあうち師傳一人づつ志誠と
萬一りも一無くよ元撫みのたとへともえ
多勢よはまたよくとよくとこうちきと
且文師傳のせよの畏敬ちよへとつとも二六
村中あとも何往ち居もへ退てほへをやの後
師傳のおまじしまれとすあ等一きもが

以て薦懐を熟一ゆきとわうまえを寫め
一ミ一めを師傳の姿と性一悔てさきとされ
あきら一日あたうて十日いふすのたゞ
か事やも敗きゆきのあひどり師傳の
日あす近の臣よ忠良がえくと見又
大事うると古今ともよ中以上のゑへせふ
のるよ師傳が摺り下りつヰタリモをも
先后抜きひゆ及づすたゞくあと治ち
そ一筆疏施一十毒と屬さうや一參附
姜桂の良薬とりとも毒よ合せし用る財も

毒の能らんちりねつて吾の主自へうくゑの
主自へ取一十人の臣よ一人不良の臣立ゆ
きて一人の毒ぬけりすく御うりむつむく近
く廻一ゆて十人よ三へど不良の臣立
流うまゆきとせぐの君らうもくもくう
め一古トヤヒテ

○賈誼うとくしよ天下の命ハ懸於太あとツヘモ
云承とソシモ改私目生後也とそく時ハ
一へのよれらがたなうて出くつゝもふと
ももろと西善すゆ一もろくく師傳アの

安よりくらしとある。師傳の性より主見はりあひし
師傳の徳は仁厚をもたらすをキアーネにて師傳の
才へは多才多通ちうとキアーネす多く仁厚され
とも博通於これで曉喻のをゆきつてゐる
多く博通されても仁厚ちうらもく忠篤の
誠うす一のあ核とあらうへと成全の師傳
とす人一び一ふ法全體のをまかへ奉事するも
あすまかへとわう拘れちうら也すして
人の賢がねさます人の善をむかへが好く
却の美行が称するもとおも古今の經義よ

うきのうを教説とつてある。教説として
一言一言をうそと曰くよしはすひ波て是と
今日の用よたとじとぞくらみあふくもと
師傳の位を授ひても害さるふへ利口教説
尔後もあて色よ似て非ちうへとははよす
きと善人へ日くようへ毎後ひ日くよすと
て世ふのうひが教うとぬぢれともへす
む波うへまくとほまう所へ師傳の官は往
するへんまくとほまう所へ師傳の官は往
○六經より以下諸書よりものある戒と述たうと

備らひう所ぢ一但一せふがあうの御とま
やもまくまき國語の楚語よ申叔時と
じる人世子のあひて私徳たうと念次之筆書
の賈祖う侍の活安の筆のすよ私切よ隨たう
う二通すふりへり 繕てまく一まく世子と
まく川うえりヰつ考據の極とづらきへき
とももその上すく人世子れ用を跡をちるの
ヨリ本統のくみやうよ二六四半よ新義を
合をあらむのされも新義の情を自然と下との
如くよきあゆめかねもの此をよとくらむて

とたうくよ涉教子の間のあひよううへくねう
よもあうふとくらぬとくとひるヤとくこれ孝悌
の德と長するをとくり下へのよすくたぶ成
じやーあふともおる所よつてきく又母の孫
のよどくー時のよくよく教養の心もく
さうて幼年みてがくよそくふも考め者
といくうわとくはひよねもくぬもくせすて
夫人のよくよく朱人をよほひにまのれをも
おこううううのうふく幼年の時よりうり
きく育ちよくわからへれあくくふもく

卷之三

思愛の情へつづくと、おもつてよきりよ
も多くあつて、次より驕傲の心、吝嗇の氣
が、一々きぬをよしと人をやーくとも、ある
て、まことに、れすも因みのうちあると、
驕すうつをうへても、はるかにあらわすと作
り、驕傲と云ふ氣も、いもじりて、人とある
うりうり、やすへて、もとのと目下よみえり、
かうふきと、吝嗇と、財宝と、むかひをあと
ちゆうとくわくと、あまの、ぐるねすらん
疎調うらうら生く、驕傲の心、あたうよまき

おまへのゆきりす
吝嗇のふく義理が
もゆかとひめくらすみ
やうぢちもろ所す

○孝友の情と厚くちんときよもおなじ徳えへ
ちんときよもおなじ徳えへ機知とぢるをすよ
すへ一猪傲のふとゆきうつむきをやるの亞
お互よ恭隸おひしにて師傳とまの教きてアモキヨモ
名騏めいじゆのふとモウシトエモお互よ義理ぎりとほと
やく見セキムみ一恭隸おひしトトカラふも互おつち
おひきあづてきものうひ扶杖ほじょうもあくやふ事こと

うううちあるとあふううううもせんりううへと
たゞ我どくすあくもひくうううとくをや
ゆたまくあやううて角たううる跡と
する人ある時師傳のくわが庵やくそい
そぬものうへやううとくおれくもうう
おへもそれとくセキラヘ義理とくもく
たゞてヤキモ行ひも下り所へ食あへゆ
大きれきを仲間僕掌へりもあへ
よ先へじくすうると傍もうへとくもくへ
ゑへあそいへとあつへた顔まで義理と

ちゆで歌謡とあつよやかうとくをまう通へ
ぬ手紙はするに筆走り紙とくもぬとむしる
とくへくへよ下は因よられ抜へるそへあへく
まくよ大うへよつへる後と事へくへくへまく
衣類酒度をもものぬくへくへますのうへ
くへ洋紙のあよとくもぬくへくへますのうへ
りくもくとくとくもくとくもくとくとくと
らと長へくへくへのうとくとくとくとくと
のうへと候約へくへくへとあくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まへぬともう一驕傲とうまぬもあら夷利
がとうとの吝嗇なまけたまきぬともほんら
のうをすらへ家は朝采のえんからくわまる
の家は衰微のまじめうちれもおもすくも
目ちの夢とひきとさうするとおせまれ
僕約とくあくやくじものともあたくやくあす
きこくとくあくやくじものともあたくやくあす
きこくとくあくやくじものともあたくやくあす
きこくとくあくやくじものともあたくやくあす
きこくとくあくやくじものともあたくやくあす
船あれ生人のうとあれも苦せ活よおゆ

まかう怒くとまのまよまひやうづくとまかう
身後すとあすくあらとまうくやへのめまはる
の自分の身と節儉すて下の恵とあつてを疾
ひくとく書藉とおくとおくとおくとくとくと
あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
まうくとくとくとくとくとくとくとくとくと
りうれし外よりうれしきと後人たとて
雅致の宅へありま國がそれとよ廣くて自由
もよくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

へ用と積もりてアモリヤアヨリ付かれた
役人ともちもやせき氣風とな一氣をよせ
下座よはくセ全八あつて出来小坐と書つ事
差出やと大居處付く見れりや
手用よみすヘハあこヤ室よとくはく人
と扶助する事としも葉落と風もれり
然るよ尾う旅居様のまた大坂の脚城失火よつき
に左へ早速の役ふとひてはをやされ財あへ
の役ふと目通すとよりひや一様の側よ小粒
金と紙よもりおまくあひよすひて定め

主翁の役人をよりナはるくん此の自から爲るそ
そくもその中の袖へ自らのつる役の男平伏
も車退ることあーとくましくとヤされ
又あよーすくひたの袖へつぶき下す
因札よ四すくひだりゆはあくも一へん底なしキル
うけもんしてはへの注進をあよゑり一モほ
大居處系所の役起持する

上をと有り乍り一且又不斷ち零よ並木の長持
ひ角あつ内よ室千あくこう室をいづねき
頃まく射印もあくあるの度間裏代り在の時

蓋とあまやくはまつてひそかにひりて一を海にほじ
ゆうゆく下るよのくおひけ所とすらへゆるりて
さへある(モトハセ)

○始よりしやく人の性く幼壯志の三時より頃ひ
戒あるとちかく幼少のモハまつ幼少の時よ
はきてるゆと熟させアヤエセすてにへうち
是非のつきまもあらうすすみすみのら得
そちうりある(モトハセ)併りやーを徳とも
こつまのたまーひ百まよとやちも幼年こども
さへゆくやくす扁(モロコシ)根(モロコシ)勁革堅木も

矣生苗本のすくうてゑくうううううのあまとも
ああうけうくくくゆゑとまのこ處本すく
をせうー承(モロコシ)師傳のくが幼少とくうもあ
きじらとやへうて大木のうあよきうひきくふ
めうて風ゑとくくもうけよ苗本の成長する
所と所因をうすうきーたもせんぐたもう無
理りもあれすとソソラキほの通り古今のあれふ
通ー必ずくくくゆゑの思とまくらーとも
め角もと多うーーも先ととまくさ
と師傳の要務うり事商とり(モトハセ)

タキシテ机の上に書藉とりき眼とあす
けんとあすすを夜の間つゝてはまつた
ハ彼もあつまつてゐるへばまかで要すと
一わざめりとも頗るさうのままでうらう
さう文もくへこむことひよめひをとせば
日のまめかばあてをひととせぬともさも
詩書お経へやひ及づす紙お経へりつも
はうねもあひふれどもあひふれ則
事間ちうづかへて幼くれまゝく涉方より
ひつゝのね活のうちよ人ものあつた

まめかばひくとくとくとくとくとくとくと
ともむかて利益のたまき

まめかばひくとくとくとくとくとくとくとくと
ともむかて利益のたまき

對人之回忠

臣下の臣下からして何うも有忠不忠の境と
驚とて毎を心度とて右の境とて
凶念兵事うりぬよア西吉は切のひよりと
取感るは忠良のために付よせし事に付そ
つれすへ難アリトシナト乃併一脉のくわく
先づるア度事ノト前め様式ハ祖文成ノ傳へ
至るるまのとくらぬやうのものと數くた
かみひこすゝ自己アラの利害とせんか
考教のととありいわくも無ノとあるものへのれ

もしくのうきのうのうふくととくは是非善惡
の沙汰よふ及る御もよ西とてと云ふ毎の事
たるノトリモかく患の論すく及べキムクナト元
人臣くらきの所うちの主君かとく發生ぬの
賢事ともよんぐのを忠臣よとせんくとおなが
人の主姓もて万人の因情よとせんく忠臣を忠事
あかトを口端を以ておもつ忠事文字へ
あると別一あらまきやうの文字とてうつて年

心事の切より面よりはううふもめあらう
所つてあを切るを勧めてくすむるもあ
あきこゝとやねふりよアミカヒドヒア
數十人數百人數千人身の家や家ふきひの
多めの有りてのりまじりまじり下
一同よそのぬりとみほひ家ふの安老とお残
するものと色とくわづかくでたまと
え首とアトえそくびとくと股肱耳目と
アトキと耳と目と鼻と股肱耳目の
四とあけて鼻は唇舌歯百骸の中す

とくに目と耳と鼻と口とあらじ
くと鼻へき唇舌歯牙の骸と左右の筋と
筋毛と一筋の主筋ひよをあらじめつぐり
ゑよ下群筋のまくとすよとある筋と
四支百骸の筋よをし筋と筋よをもく
筋ややうするのよとすまくすりまくす
目とくらうと耳とおとよとくたすけ
金と一筋とくらうするといふとあくね
よ古より要ひのよとよい筋と筋良の筋と
まくと代いたとくと一身達志すあらうる

起居運動すやうすちよつてあらへまゐる
まゝかくまへ是のすもじてか向ひ是へまゝ
向ひはよそとおも投もたれもともとひ
金も物も傷き耳目に舌欲する所のまゝふト
是と強安あるあつて代とへやーとま
時要るよつて不思の底下よまう
時たゞへつ身を弱多病よまう起居運動
すく筋も骨も筋肉もよもよもよもよもよも
よつまことすれどもよもよもよもよもよも
よもよもよもよもよもよもよもよもよもよも

する所のまゝよん是よりて困亂裏聲する
ふとわう淺さ時代とへやとまよつて一身ハ是の
まゝよるとひて多病と稱す是あへ難居のよひあつて
て多病とひよひよひがひて衰弱とあ
ねく城よもよへ行年已うそら左右の手の
よもよもよひよひよひよひよひよひよひよひ
不及ヤアシト然く人我お互よそひ食ても是
耳目の一身かなふめくおぢれりよもよもよも
よもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよも

ヨリト是宣く身づの利害とすくと極ム也
あるらがて人おきにうりとナト人我ミア
我ラ腰もとモニシテ有モ志勵ハ仕務とるぬたるハ
患ふ給て不無の事」キシマテト是別キハつむ
候トシテウムモト足のいゝもとあリテヤマムモ
モの役トヤマトモトニスアヘアリク役とく
うるをもて身の口へぬけへ躊躇踏じトヤマホの
モトモトナス日一ノ身よつきうちモ左右下
すちモちかしてつ角ア前ヘ一身の不自由モナラ
て用コトナムモトヤモトモトモのたまうべ

カ爲シテ人と不患不令の口トヤトアシテ年
いそ金きりの金近トモ一ミ糞きりの糞穀と
がモ法拂役法後役の拂ひ残のう後この
拂うぬ金うと名ハ穢うの歎アトモトモナヨ
ても不考ナリモ多々トクハ志の場と云フヨ
毎ノハリ金きりも不肖トモて在無ヨリ多
くも出すト法拂役もふ肖ガトて在無ヨリ
もくつて拂ひハ作リナリハ善清の出来と
がうのやと金方のセリ多きがつてこう
本院と十シナキナス勘定キハ収納皆缺とこ

故人を徳代友のる姓へあたりの氏よりある所
残さぬところとなりてはる歟の清譽とうとう
ありふとおもふよしと食て我ひくと志士と
すくと我を石戻ものよめらぬやうふくらう
くる是と云ふ忠良の臣と称して家臣の五宗
と云ふトアリムトアリ一官の功と云ふと在り附へ
代役所の迷惑ハアマダレヌヨリ前よりの功へ
立ても主とも多きの功へアリモ換する事
きくあつまつてあすへんの事アリキアリ
ちく莫大の不忠アリト家國の上となし四面皆下

めくくらむをより出でたりとて左手ともよ
うやうの類が姦邪の臣と名つキアリ不忠患
目あの小功と云す家臣永久の妹孤もアリて
自己一人の主ぬとかセウス方人の功もなす
事もけますをよその大老アリヤハ戰場か執
事へ已そく主ぬと云ふらむと云ふ敵よ
猪ノ毛を理ひまくヘトナリスヘアリの主ぬ
事ももやうを乞ひ候他組にて十人討えり
すととも我歎として三人功名がすくへよーとな
り候モチモチ軍の負がたるア

の姫後とおふく常くアモモクぬ跡をもる明軍
ヨリモモヨ活の場より肉糞足キのやく助太刀
ケキトツセモシヨウ方の獲利とへ形るされ
大ねきへつて奉公見よる忠義之士が
軍令よりゆけりゆきの功名とがく禁りてキ一
の越度より才能ゆかト一人の本拠とじゆうで
味方の勝敗とくとくぬ患ひゑみ和漢古今同
よキモモモモモモモモモモモモモモモモ
執政子文とアト人三度まで執政よめうらとも
そつたひくよはのを嫌いとなれどもさくま

三度まで執政とア放きりてもも財もくわせ
となく顔色もく自身の勲の内が宣アト
ともあらじとも政役のふるよもくとく
とぬよや送うてはくわすくまくぶこれ
自身の利と利をつれてその家のあなた
やキテ大切よなトかよ孔孟も忠也と称
きひトツアト人の文とくれんとア
礼讓とくちえうくとくわく我よほと
らす人のよれとたうる事アト人のよれとよれ
まちやくとくわくと人アトするつて執政へき

爲うもくへとすうめんがめてとまくからへと
ちひきのりをあやしむとじりやあとむじりやへゆたうり
りて家を安寧のおほを成就致すとよみ
がもつだらぬ不患のりふれ礼儀の心をもつ
おとうりとこそ家國のそりまれ是トう生
あよれるもよく礼儀とて云ひとあらむ行
あんそくを作りしノ荷の執政爰仲とア人
礼義廉恵の四が四維とすりけて云承治うひ之
經とゆくやトの四のひく徳ありもすへ國則
滅亡すとアトれい不踰節とアソシム身の

ヤリハサギテヒトヒトおう一走りのうまと
みト義ハ不自進とアリヒトヒのリト云ます
自己より立身したくじやうする所めのあをと
リト處ハ不蔽惡とアリテ我あそそぎお伺
ヤリキテ今日ひさる事うもうはも充てめの
うきをすすむ耻り不逞粗とアリテたゞ身のあ
よされとそしめぬううふらがトする
あまうもん所めがヤハ云四人のあがきへ
のむうへ爲すも是とアリヤアトス不承すふ
人の下たるもつけ四のひく徳よととまき

不アタヘと自然と忠良の臣と仰りて家主のる
よふ家の人とあやすうと群臣とあくふ官儀
がりうちまで君の公私とお扱いやうへたとて
ヤキは樂人の達太鼓筆ひちやまをもみ
道具がねよりて一曲がうかして小唄うきわす
五音六律調子あひて何のやうもうとうへぬ君
のおよ質きの拂ひたるもすれもら筆人の
序代をかといつて及へきをうしよくらむる
上手口志の出合たる時へすくほのかうかり
いあくらとも筆ひちやまとあすけうる

太鼓があすけて相互よ人の間をゆきぬるよ
一曲とあきうれしてすくへて又もえど殊縁の
たぐのよそへとくへとくへのあいあうたる
時へ筆の筆箇の筆斗と我へと吹きくへ達
ち鼓へ我へとすあけて我とう箇のよまとあ
きたく太鼓の名人となづれくへ審行の後急
やうかりよもじゆすおのまくへ調ふが一
そひよぢんとそりとそりうぶれをせんぐ
耳とぬき先後とうへて一曲の筋をとまちうね
りとにがれれたがおよび是ひくよろひあふる

お見すのを中よりおこなふもとへりと
おもへよめやまされて功ちも無功もも一回
下す手の事一もがくやすあちをあき
そよぐの政よもじつま夫へんじうの
所とらぬなり月出度らむくとおながり

お見すのを中よりおこなふもとへりと
おもへよめやまされて功ちも無功もも一回
下す手の事一もがくやすあちをあき
そよぐの政よもじつま夫へんじうの
所とらぬなり月出度らむくとおながり

建学の大意

君相 三個條

○日月星辰度數を定め秋分にて地溝より北を改
めす是良事也又は朋友の人民に於てはも論
議改めず孝恃忠信仁義遂讓りを訓ありしそう
も徳とあると有るものへり一然として財勢古今と
交へ風俗五方成矣よすれども安上利民の政
とあるよりへ生徳とあると云ひゆとする達の事の
大丈南宮敬叔う與善射暴鹽舟俱ふ得其死然禹
稷躬稼る有天下とアたる財れるものもすがまへ

為德亦若人とやひよひへなはて為徳の本義と
すへ一善財溫舟の技藝の方へよ越境すと
りそぞれをもくわとり不祥かく自己への
欲と逞て在城裏へ入と極じぬらまをとひて
終々身死をすとあく死稼すとつづらとの
事あせすとくは界廢頑劣へよまれる
ことをよひそれとくとより吉祥善く自己
への安逸をきれてをがままへんが極じのにら
切うるとして極すとくのへんを盡すされ
安上利きの取り仁義徳めとあすと第う利々方

智が用ひる小敗りこと古今の経験然たり日月
星辰のあ古の天地が照臨一も夏秋のあ古
の氣ががま席すれど自以功とをす自以功と
さす即天地の大にとぞ天地の大穰ともアト
あけに穰よめうる人と有徳あると称一此
仁穰よそじくると不祥小人とよえよまよよ
位すれど愚直下ふ降りあよあ走承服すかくよ
よ位すれど食虐よおぞれくあよ民怨憤す
治たへ承びよ起て憤慨の怨憤よ生す是が以て
有徳あるとぞ嘗ちて顎位卑微よす名稱よ

徳有あるよりよりおう徳り孫(孫)讓よりまもるには
美德の仁志の所れど不傳の驕慢よりあらうるは
悪徳の不仁の所れどより徳と□と名はす
一と美德と傳ド一悪徳と除ちんる也

○ □ へ後の内ドリ □ □ へ後の内ドリ
徳の内ドリ徳ノよひとさけられ已有來と
氣よふと自らせうるがちぬまふもれ
驕泰のらぬともとよ長一亢傲の慈心ともよ
朱ア四書の通を讀きぬとも元彼すれ給ふ
□ の執筆より見うと萬才たる廻

りううる良事と用ひて仁厚恭敏のよまくも
へき顯位実職より仁義の人もく何とくて忠愛
の徳と施しりへきの忠孝の徳より降りすれ
ト氏の所より是れおへきの細一まことも
二百年末お辭をうるふ風うわくのめまの
ちひうあへんといちに處子のうへけちよわづ
へづくす無縫とく縫がおこすとよも縫と無す
とく恭遜のとくをねるうすりとく一國万民の天
かま作る上の名とくして恭遜のとくが渡りさ
れをゆくは後所とも後の内ドリまもるもれ

爲そり又の上よ處——擇遜辭讓のとくも
そすれ行はりうる所、すこしも恭遜の徳のうるじ
たと毎へうるきの彼よりおりて、あやういと
えたる諸侯がれも、氣をつけてはまつて、
あれをくまゝ鐵孫とせふ。幼弱どもちきの上
よたぬくわへ勢くらさんとくと、あやういを佐
成者——キ程とまゝりて朝廷より參事よも
りや。參位身よあきりやすのときまのく
ねうきもを要もつて、すくとくとくとゆす
ふとくさくあよたせす人の名徳とよみを

今日の恭教とあるつてほ末の諸侯とくとも
多きの門もんと僅よちくた扇の厚ひうつよ
ニす内すへ極めのうたとありがよへ參事のま
がちやうんと行のねくとくとくと行の安こう
すくとくとくと害とするふあくと候が
たるふ祥少くちりと祥僚のとくと佐さ——
政柄とおうとおふかきくにふのかたよへ
わよへす一の天とを作ゑよあ民の安利
がふとくしてどうもくふくもあ郊の河底よ

ぬとけり 鋤歎がみゆき そめりとをすり
世様の大臣義弟はゆゑともてた郊外より
も希代のまよす草平家州のまほうにて 疎泰
のやうい性より耳目のみを犯すよりよし
ことよりはる厳刑とれ 四方のあくにと見る
あともとひきうち所どり出づん仁義恭毅のたとえ
自分の所うちとまつすといふくらうを
ゆるまひのまくと前車の覆るがとて後車の戒
とすまゆることとてつむひなより行人のかへり
まくとあるれりは前とかくまくとまゆのあり

もるあうちと一若よらじとおがくわくとこと

すもく人よきじゆり古のぬ列わり

○水穀の入るおり薪火の木農工商より卿大夫より
鎧金おう茶の上白銀ひゆ 薪の燥れく燃進
口も中とて川の鎧金うつきひひけたく何と
以て飯とたまに出す(充)と先と鎧と傳えて皆も
もよよ飯の煮あくとん火のとくにけんりよ
もわくとと傳つとくやくすると鎧をふすべ
かす薪火のあふをせられゆく時先祖以来の
常典のくちくは鎧こう所要のたまよ

多きものと云ふことを以てよ死難と多く残きて一坐の性命といひ多く後どうたまへ生のまゝとよ死難が残ちると政の根えられと多きもの候もりぬれどもとのあまめ大切の儀からやたおよびすありうるをえよりまの榮達一坐の仰をする人まとあつすを檜自性一然まともに師長へ坐至の席側、みゆきしてまことに夫子の坐と云まめあり一月一次講坐より洋室一師長は教説して恭遜の礼と坐ふ一考ふのがと勵すべしと私うちの多きもの數面とあすまたくる

師長 二個條

○師長の仕へ人よ信ちるるよりあり人よ信ちるる
己うちのの黙をもつてあり己うちのの黙をもつて
とつての前をもねねと云はれども退屈をす人の信
不徳と云す勵めともえもてねとたゞす人の
の信りも中より生す己うちの性すかくそくと
きと自己よりゆきと坐一企て及ひ傍て
然の傍れとすへ左へ弦韋の戒りをめどす
よたゞす師長はまゝ自弦韋と坐つて一刻柔利純良キのまゝよ元氣とゆか一若わよ海よ

ろく人と用ひう法とし人とある法よあす承也
退故進きゆ也あへ故返りとせらまひとひて
仲毛の人とさうひゆひ一客ふとせんもじ
流よ先馬の手邊とひう弱きるの院とへきて
力ねやもくともよすもじゆよくとくにき
えれり解とをへや解と解と解と書生の成敗と
己うはうて孝子忠臣仁義廉讓の教義とする煙
うち一館の文母とがくて善と廢へあと掩ひ
厚は厚とう内おで变化の左と補助するよりと
飲食のまも油ひもくらむ(たと師長の極を

形る)一師長の教するときもとりとくとく教訓
の法と教ふてすかよ志學と生やうらる
ゑよえあ川のとく面と西東か一智とく
敵卦とくつあくうてあやまちあるの夷讓を
とれきくもると教ふすくへりとくすあく
亥淪の仕法の孚記よ祥憲すれそまうけひと
繕ひすく一

○孚記曰小雅肆之官其始とくに般達事の主を
よ出へきとく教化りつくる人よあれる

のふいふ家を

とどきおり群僚の上々佐をしてつまひの安危と経す

□のふへ大目付

従おれ

とわり令と上よりケ令と下より施する卑賤職
職掌はあま掌のあらを上よりほし下よりひし人
とあらひるひちうらめまともひそくうて縦
のんおとを悟ぢら他日の用よ徳ふると充和
才の一の教誨とす

生貞 一個條

○生貞の令と下りて多岐の才子よもやの事とあれ
も主張中別の本心とこそもや書典よ通

徳藝よかく仕事よとの用ともうがひて今日
の業とすその勤うて師長のあよもひより
おひよーふく別よふると論すと及ぶす

こあるふよまつたくす一時作りてあくたる
ゆゑてあく

卷之三

